日刊 動労千葉

84. 12. 14

No. 1817

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二―八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

―臨調・行革粉砕！　三里塚ジェット闘争勝利！―

敗北主義ふきとばし『60・3』を闘おう

津田沼支部定期大会開かる（11/27）

「『本部』革マルの一掃、一人ひとりが活動家となって、勝利の血路をきりひらこう」―― 挨拶にたつ山下支部長 ――

津田沼支部定期大会は、11月27日、電車区講習室で50名をこえる代議員・傍聴者の参加の中で行われ、10万人首切り―国鉄労働運動解体攻撃粉砕、「60・3ダイ改」阻止へ総力で闘う方針を決定した。

「津田沼一〇〇名削減」攻撃を断じて許すな
―山下支部長挨拶―

大会は、綾部副支部長の「3・25、10・10決起の力で『60・3』を闘いぬこう」との力強い開会宣言の後、議長に大木繁喜代議員を選出しすすめられた。

冒頭、あいさつに立った山下支部長は、「今日迎えている国鉄決戦は今までの闘い方・考え方の延長では勝利できない。今こそ一人ひとりが活動家の精神で闘いを創り出す時だ。三里塚を闘う多くの仲間との連帯を軸に、中曽根と真に対決していく運動を拡大することが勝利のカギだ。当局の先兵となり下った動労『本部』革マルを追放せよ。『60・3』合理化は、先に提案された動乗動改悪を軸とした乗務員68名削減をはじめとする計71名削減に加え、更に続いて攻撃が予測されている検修関係合理化を含めると、津田沼電車区だけで実に百名近い大要員削減の攻撃だ。敗北主義や屈服をのりこえ、全員まなじりを決して闘っていこう」と力強くよびかけた。

職場闘争、革マル追放―中曽根打倒の政治をまき起そう　―布施書記長―

来賓のあいさつの最初に立った船橋市議の中江昌夫氏は、「一九四九年のレッド・パージ、定員法―10万人首切り、朝鮮侵略戦争へと向った歴史を再びくり返させないために闘おう。国鉄の闘いと三里塚の闘いを結合して闘うことが、中曽根の『総決算』攻撃に勝利する道だ。船橋市における非核平和都市宣言の推進、下総基地米軍使用反対の闘いと合わせ共に全力で闘う」と決意を明らかにされた。

本部を代表して立った布施書記長は、「今が正念場だ。敵の側はここ二年半のうちに10～15万人の首切り、『87年―分割・民営化』を打ち出している。その突破口である『60・3』も、動労『本部』革マルの屈服＝協力を通じて二万五千名をこえる合理化を狙っている。われわれはどんなに苦しくともこれを阻止する以外ない。『60・3』は労働者に敗北主義をうえつける攻撃であり、国鉄労働運動解体は、そのまま中曽根の軍事大国化・改憲へとつながる。勝利のポイントは、第一に、職場生産点の闘いと動労『本部』革マル追放の闘いであり、第二に、中曽根を打倒する政治―力をつくりあげること、この両方を結合してはじめて勝てる。すでに、『3・25』、『10・10』、『11・10』と、この政治の流れがつくられつつある。これを『60・3』にぶつけ闘おう」と力強い決意と、闘う方向性を提起した。

三里塚―国鉄決戦を闘う方針と体制を確立

執行部より経過報告、運動方針、予算案が提案されたのち討論に移った。主な意見は、①「三本柱」、とりわけ出向の現状について、②「60・3ダイ改」案での津田沼の状況及び全体像、③動労「本部」革マルの裏切りの実態、④「過員対策」等の当局の動向、⑤支部サークル協活動の強化について、などが出され、執行部、本部より答弁を受け、満場一致で闘う方針を確認した。

その後、役員の選出、新旧役員あいさつ、永嶌青年部長の音頭で組合歌合唱を行い、最後に山下支部長の団結ガンバローで大会を終了した。

一九八四年度役員

執行委員長	山下　幸	43	電運士
副執行委員長	重見敏夫	38	〃
書記長	綾部光男	38	〃
書記次長	高石正博	39	〃
執行委員	深見四郎	42	〃
〃	伊藤詔一	42	〃
〃	高橋邦彦	38	〃
〃	川口春雄	37	〃
〃	椿　勇	34	〃
〃	川崎昌浩	26	運修係
特執（青年部長）	永嶌　務	26	電運士
会計監査員	大木　孝	37	〃
〃	渡辺敏博	40	検査係
〃	篠塚康則	30	事務係

＜支部通信員・発＞

―全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！―